

高機能自閉症者 Donna Williams の 幻視・白日夢・夢における超自然的特性の吟味

名島 潤慈

An examination of supernatural traits in a visual hallucination, a daydream, and dreams of Donna Williams with high-functioning autism

Junji NAJIMA

要約

高機能自閉症の Donna Williams が中学時代に見た1つの幻視、同じく中学時代に見た1つの白日夢、20代に見た2つの夢は彼女によって身体離脱体験や予知、共振といった超自然的性質を付与されている。本論文ではこれらの超自然的性質を可能な限り彼女の内的枠組みに沿いつつ整理してみた。そのさい、彼女が提示する説明概念と実際の出来事との食い違いに留意しつつ、若干の疑問点も整理した。合わせて、「意味ある偶然の一致」という観点から、彼女が提示する説明概念を論評した。

キーワード：高機能自閉症、夢、超自然的性質

I はじめに

筆者（名島，2009）は先に、高機能自閉症の作家・自閉症コンサルタントである Donna Williams（以下、W と略す）が3歳未満から26歳までに見た10個の夢を整理し、そのなかでも特に子猫が登場する3つの夢や、W が過酷な世のなかを渡っていくために創り出した「仮面の人物」(character) であるウィリーやキャロルが登場する2つの夢を W 自身の内的枠組みに沿って分析した（10個の夢はすべて、W が1992年に発刊した *Nobody Nowhere* に記載されている）。

「子猫」は動物の子である。自己の感覚と感性のままに生きようとする動物はしかし、共同社会の側の感情と論理によって束縛される。W は自伝のなかで、「健全な精神を守ろうとする機制が非常に敏感に働いている場合が自閉症である」(Autism is an extreme example of a mechanism that acts to protect sanity.) と述べている (W, 1992)。W はまさに自分のなかの「子猫」を殺さずに、それどころか「子猫」を保護するためのさまざまな心的操作（仮面の人物の創出）を用いて、社会的人間へと成長していったのである。

ところで、W が出版したさまざまな著作を調べてみると、W が見た夢は26歳以後もある。そこで、3歳未満からそれ以後に見た夢をすべて、表1のように整理しておいた。夢のタイトルの欄では、各夢のタイトルと出版年を記しておいた。

表1 Donna Williams (W) が見た夢

番号	年齢	夢のタイトル	夢の内容 (要約)	顕在感情	W自身の連想やWによる補足
D1	3歳未満	パステルカラーの丸いきらめきのなかを歩いてゆく夢 (W,1992)	一面真っ白の世界。私のまわりにはだけは明るいパステルカラーの丸がそこら中にくつも浮かんで色とりどりにきらめき、そのなかを通過してゆく。	うれしさ。	この夢は生まれて初めて見た夢。うれしくて、声を上げて笑いたくなるような夢。 [Wは3歳まで自由に「私の世界」を楽しむ。]
D2	3歳頃	下へ下へと落ちていく水の夢 (W, 2004)	夢のなかで、下へ下へと落ちていくアクアブルー (水色) の水を覗き込んでいる。	記載なし。	[Wは31歳のときにナイアガラの滝を見学してD2を思い出し、飛びたいという子どものころの衝動が久しぶりに蘇る。]
D3	5歳頃	巨大な津波に呑み込まれるがなんとかこらえる夢 (頻回夢) (W, 1992)	丘の向こうから巨大な津波が押し寄せてきて私を呑み込む。私は棒に必死でつかまり、ぎゅっと目をつぶる。自分を連れ去ろうとする波の圧倒的な力で自分がばらばらになりそうなのをこらえる。潮が引く。津波は猛烈な勢いで丘のほうへ吸い込まれてゆく。恐怖で動けないまま棒にしがみついている。	恐怖。	この夢は、本当の私がそれまで他人の感情というものをどのようにとらえているかを象徴している。 [Wの父方祖父がなくなる少し前から繰り返し見た夢。]
D4	11歳	子猫が大きなネズミに姿を変えて手に噛みつく夢 (W, 1992)	目の前に現れた美しい青い目の子猫の頭をかがんでなでてやろうとしたら、子猫は大きなネズミに姿を変えて私の手に思い切り噛みつく。血が飛び散り、悲鳴を上げて目を覚ます。	記載なし。 (恐怖?)	記載なし。
D5	21歳 (大学2年生)	私の誕生日に3人で乾杯する夢 (W, 1992)	夢のなかで親友の女性と、見知らぬ黒い髪の若い男と、私の3人で、アンティークレースのテーブルクロスのかかったテーブルのまわり立って、クリスタルグラスを掲げて乾杯する。2人は、「お誕生日、おめでとう」と言う。	記載なし。	私はこの夢を見た後、友だちに詳しく話し、「なんだか私、引越すことになりそう」と呟いた。この夢は2年後に現実のものとなった。つまり、2年後の誕生日にティムとカレンと私は乾杯した。
D6	22歳	友だちの部屋のベネチアン・ブラインドを見つめる夢 (W, 1992)	夢のなかで、友だち (トリッシュ) の部屋のベネチアン・ブラインドをじっと見つめていた。私は冷や汗をかき、体をこわばらせて、夢から飛び起きた。	怯え。	[かつてWは7歳という同じ年齢の転校生のトリッシュと親友になり、彼女の家に泊まる。ある日トリッシュの部屋のベッドできちんとした姿勢で寝ようとして、なかなかうまくいかない。Wはベネチアン・ブラインドを見つめて、早く朝になるようにと祈り、泣く。そして、見回りに来たトリッシュの母親に「家に帰りたくない」と言うと、母親は「帰らなくていい」。Wが「ここにはいたくない」と言うと「どこに行きたいのか」。Wが「行きたくない」と繰り返すと、「行けないよ、ドナ。どこにも行く所はないのよ」と言う。その言葉が

					Wの頭のなかでこだまする。Wはその後、15年にもわたってトリッシュの夢を見続ける。トリッシュの家での、あの晩のWは、心細さや自身の無力さを思い知らされていた。]
D7	20代前半?	友人が金属的な光沢のある赤をくれる夢 (W, 1998)	夢の詳細は不明。夢のなかの友人は男性。	記載なし。	何百マイルも離れた所にいる友人のことを思っていたときに見た夢。この夢の後まもなくして郵便受けに、彼が彫刻を施した小さな赤い金属板が届く。
D8	26歳	海の夢 (頻回夢) (W, 1992)	夢の詳細は不明。Wはこのころ、悪夢のように繰り返される海の夢に悩まされていた。	記載なし。(恐怖?)	この夢はおそらく、自分の葛藤を象徴的に表している海の本物の姿に面と向き合うようにと私を駆り立てている。
D9	26歳	弟が7匹の小さな子猫を縛り上げている夢 (W, 1992)	弟が7匹の小さな子猫を縛り上げている。私はやめさせようとして弟に近づく。そのとたん、弟は笑いながら、高い塀の向こうへ1匹を放り投げる。同時に私は母親に、後ろから髪の毛を引っ張られる。私は必死になって子猫たちを救おうとしたが、自分も髪を引っ張られ、壁に頭を打ちつけられてどうすることもできなかった。	焦燥感。	私がキャロル* ¹ になっているとき、本当の自分をいつも子猫の姿として思い描いていた。私が出会ったキャロルは私を彼女の家に連れていってくれた。私はまた、7匹の子猫の入った袋が捨てられていたのを見つけて家に持ち帰り、ガレージに隠して飼った。後には私自身が、そのときの子猫たちのように、いろいろな人のガレージで眠ることになった。私の心の中では7匹の子猫は1匹1匹が虹の色の1色であるように思え、さらにその虹の色は、ひと色ずつが人間の抱く種々の感情を表しているように思えた。弟への感情は、私が自分とは別の人間だと認識した人に抱いた、生まれて初めての感情。その弟が夢のなかでは子猫たちを縛って壁の向こうに放り投げていた。縛られた子猫たちは私自身の象徴だった。心にくっきりともを感じてしまうようになったことが恐ろしくてたまらず、金縛りになっていた私自身の姿。その無力な本当の自分を私はこれまでキャロルに仕立てあげては壁の向こう側へ、世のなかへと放り投げてきた。
D10	26歳	壁に開いた穴から祖父* ² が去り、母につかまってしまう夢	壁に開いた穴から祖父は去る。私は祖父を追いかける。壁の穴を抜けると不毛の土地。大声で祖父を呼ぶ。声はうつろに響き誰も現れない。元の壁に向かって走り、再び最初の場所へと穴を抜ける。母	記載なし。	記載なし。

		(W, 1992)	が待ちかまえていて私はつかまる。壁のこちら側に閉じこめておこうとする母に私は全力で抵抗して向こう側の土地へ戻る道を探すが見つからず、完全に閉じこめられてしまう。そこで飛び起きる。		
D11	26歳	7匹の子猫に餌をやって後悔する夢 (W, 1992)	屋根裏部屋の木の床をネズミが1匹走ってくる。続いてもう1匹。男の人が出てきてネズミを殺そうとする。私は「殺しちゃだめ。それ、本当はネズミじゃないの」と言い、だいぶたって再び言う。「本当は猫なのよ。ね、餌をやってもいいでしょう」。男が棚の戸を開けると中から缶詰が転がり出る。私は缶を開け、子猫たちを呼ぶ。こちらのほうへやってくる子猫を、男は撫でようとする。「だめ」と私は叫ぶ。「さわったら死んじゃう」。餌を食べると子猫たちはみるみる大きくなる。私は餌をやったことに後悔の念を抱く。この後私がいなくなったら、猫たちはどうなるのか。床にしゃがみこんだ私を男がのぞき込む。私は囁く。「子猫はもっといるの。全部で7匹」。そこで私は汗だくになって飛び起きる。	後悔。	記載なし。
D12	26歳	10代のキャロルが女の子を守る夢 (W, 1992)	私は10代のキャロルになり、道の角で友人たちとおしゃべり。近くのゴミ箱から、ぼろぼろの服を着た汚い4歳くらいの女の子が出てくる。キャロルは友人たちに背を向けると彼らとその女の子との間の壁になり、女の子を見つめ、「帰ってきたのね」と言う。女の子は道の角まで後ずさりする。「大丈夫。絶対にあの人たちはこっちに来させない」。キャロルはそう言うと友人たちから離れ、女の子の前に立って歩き出し、女の子へ後ろ向きに手を出したが、ついてくるかどうか確かめるよう振り返ることはしなかった。女の子は走ってきて、キャロルの顔は見ずに手だけつなぐ。2人はそうして歩いてゆく。女の子はおびえたような目で何度も肩越しに振り返る。	女の子のおびえ。	私の心のなかで、ついにドナは子猫から人間の姿に変わった。ウィリーは既に、やさしく私を励ましてくれるお母さんになっていた。さらにキャロルが、人の群からWを守ってくれると約束してくれた。最後の戦いは、ウィリーがキャロルを受け容れなくてはならないこと。
D13	26歳	10代のキャロルがウィリーの後ろを歩いてゆ	広い倉庫の床をウィリーが歩いてくる。その先には10代のキャロルがいて、隣の男を指して「私のお客よ」と言う。その口調は、キャ	キャロルの感じたうれしさ。	記載なし。

		く夢 (W, 1992)	ロルが娼婦のようにしてその男と暮らさなければならないことを示していた。「そんなふうにして暮らす必要はない」とウィリー。キャロルは反駁する。「おいで、ぼくと一緒に暮らそう」とウィリー。見知らぬ男は傲慢な態度でこちらを眺めている。「どうやってお金を払えばいいの。私、お金を持っていない」とキャロル。「皿洗いをすればいい」とウィリー。「私、自分のことぐらい自分で何とかできるわ」。少しうれしそうにキャロルが言う。「もちろんできるさ」とウィリーが応えて歩き去る。キャロルはウィリーの後を歩いてゆく。		
D14	28歳	自分の声で話す夢 (W, 1998)	夢のなかでも私は手に入れたばかりの自分の声で話す。その声が私の耳に響く。	記載なし。	[ウィリーの声でもキャロルの声でもない、自分自身の声を見つける。その晩、D14を見る。]
D15	29歳	イアン* ³ が誰か別の人が変わってしまう夢 (頻回夢) (W, 1998)	結婚式まであと2週間というころ、毎晩のように見た夢。夢のなかでイアンが誰かに変わる。最悪だったのはイアンが父や母に変わってしまったとき。	最初ひどい恐怖、次に敗北感、やがて無頓着・無関心。	Wのなかの防衛心による攻撃。
D16	31歳	巨大な爆発の火の夢 (W, 2004)	見知らぬ家のなかに立っている。床には小さな火の玉のようなものが光りながら回っている。それを拾い上げて床の真ん中に置き直して手で回すと、光はくるくる回りながら火の粉を飛び散らしはじめ、しだいに大きくなって花火のようにはじけだす。そのとき、どこからか、竜巻か地震でもやってくるみたいな轟音が響く。隣の部屋の窓まで走っていくと、遠くで巨大な爆発が起きている。地平線にみるみる火の手が上がって、その火がまっすぐ家のほうに向かってくる。私は窓を離れて全速力でもこの部屋に逃げ帰ったが、そこにはミック* ⁴ とイアンがいる。それぞれの手を握ると、3人で魔法円を形づくるみたいな格好になる。最後の瞬間、さよならと私は言う。すべてが消える。	恐怖。	記載なし。 [この夢の翌日は、Wとイアンの2回目の結婚式であった。]
D17	32歳	父* ⁵ の夢 (W, 2004)	父は裸で、自己中心的だった自分を恥じている。そして、砂利道を歩いて、2つの窓が向き合っている所に私を連れていく。父は怯えて震えている。「こわがることはない」と私は言う。そして、父に一	父の感じた恥ずかしさと怯え。 Wの感じたあたた	私は目を覚ました後しばらく横になったまま、心のなかでごめんねと父に呟いた。 [スクルージ (Scrooge) とは、イギリスの作家 Charles Dickens が1843年12月19日に出版した

			方の窓を覗かせると、次から次へと女性と遊んだ女たらしの父が見える。次に私は、「こんなふう生きることもできたはずだ」と言って、『クリスマス・キャロル』のスクルージの話のように、もう一方の窓を覗かせる。私は父に、恥じることなく誇りをもって歩いていってと言う。父は自分の癌の話をする。私は、あたたかさとしろしさの両方を感じながら目を覚ます。	かさとしろしさ。	小説『クリスマス・キャロル』(Christmas Carol)の主人公。強欲な守銭奴、高利貸し、孤独な嫌われ者。クリスマスの前夜、自宅に帰ったスクルージの前にかつての仕事仲間のマーレイの亡霊が現れ、ついで3つの霊、つまり過去・現在・未来のクリスマスの霊が順次現れて、いろいろな光景をスクルージに見せる。その結果スクルージは改心し、慈善の人となる。]
D18	35歳(?)	インストラクターのマーゴ*6の夢(W, 2004)	マーゴが夢のなかに出てきて、「娘たちに愛していると伝えて」と言う。	記載なし。	記載なし。マーゴはある夜自宅で頭を強打して脳内出血。Wが入院中のマーゴと電話で話した翌日、死去。Wにとってマーゴは「魂を救ってくれた人」。Wはマーゴのために歌を作る。その晩、D18を見る。

- *1 キャロルは実在の人物であるが、それと同時にW自身が作り出した仮面の人物。
- *2 Wの父方祖父はWが5歳のとき、藪のなかの小屋に祖母を残して死去。
- *3 イアンはWが29歳のときに楽器店で知り合った人。知り合った後同棲する。
- *4 ミックはWが31歳のときに知り合った人。日本からWを対象としたドキュメンタリー番組の撮影隊がやってきたが、その撮影スタッフに加わっていたアイルランド人のフリー技術者。Wは次の、カナダからの撮影隊にもミックに加わってもらった。
- *5 Wの父親はWが31歳のとき、58歳で死去。
- *6 マーゴは、Wが31歳頃知り合ったダンスのインストラクター。40代。読み書き障害(dyslexia)があった。

本稿では表1の夢のうち、D5「私の誕生日に3人で乾杯する夢」とD7「友人が金属的な光沢のある赤をくれる夢」を取り上げる。そして、これら2つの夢以外に、Wが見た幻視と白日夢を取り上げる。これらの夢・幻視・白日夢はWによって、予知や共振、身体離脱体験といった超自然的性質を付与されているからである。自閉症者がその自伝のなかで夢や白日夢などを記述していることはもちろんあるが、それらはもっぱら心理的な不安や悩み、ストレス対処と関連づけられたものであり、Wのように超自然的性質と関連づけたものは珍しい。本稿では、Wが提示した超自然的性質について吟味してみたい。

II *Nobody Nowhere* に見られる幻視・白日夢・夢

Wが28歳のときに出版した*Nobody Nowhere* (W, 1992)によれば、Wは中学時代のある日の夕方、新しく転校してきたロビンと一緒に初めてロビンの家(学校からそう遠くない公営アパート)のそばの樹の下に座っているとき、夕闇のなかを男の人がこちらにやってきて少し離れた所で立ち止まると、そのまま手を振り続けるのを見る。そして、そのことをロビンに言うと、ロビンは誰もいないと言う。そこでWがその「おじいさん」の特徴を詳しく話すと、ロビンは、また少し後でロビンの母親も、それはロビンの祖父みたいだと言う。そして、このWの幻視の3日後にロビンの祖父は死亡したという。[W自身はこのエピソードの記述において、幻視(visual

hallucination) という術語は使っていない。]

そのころ学校でも、奇妙なことが起こるようになった。W は白日夢（白昼夢）で W が知っている子どもたちを映画を見るように見て、（白日夢を見た後）白日夢に出てきた子どもたちのところに行って W が白日夢を見ていたところに何をしていたのかと聞いてみると、「流しの上でジャガイモの皮を剥いていた」とか「ベッドに入る前にピーナツ・バター・サンドイッチを齧っていた」など、非常にささいな点にいたるまで現実はずべて白日夢の通りで、W は驚いたという。[この白日夢の記述の箇所では daydream という言葉が使われているし、また、「この現象はまったく自分ではコントロールできないもので、自然に私の頭のなかに浮かんできた」(This was nothing I had controlled, it simply came into my head.) と書かれているので、これは幻視ではなくて白日夢である。幻視も白日夢もイメージであるが、一般に幻視は主体の外部に見え、白日夢は主体の脳裏に見える。]

以上のエピソードが実際に W の体験したままと記述したものであるとすると、中学時代のロビンの祖父の幻視は、夢の用語で言えば「テレパシー夢」(telepathic dream) に相当しよう。もっとも、W が幻視した男がロビンの祖父であれば、死の近づいた祖父がなぜ直接の血縁関係にあるロビンの眼前に出現しなかったのかという疑問が湧く。つまり、死の近づいた祖父の、可愛い孫娘（ロビン）に別れを告げたいという強い思いが伝わってきて眼前で映像化されるのであれば、それはまず孫娘にキャッチされて映像化されないとおかしいことになる。もちろん、祖父と孫娘との関係がきわめて険悪ないし疎遠なものであれば孫娘がキャッチしなかったのも納得がいくが、そういったことは何も書かれていないし、なぜ孫娘ではなくて W がキャッチしたのかという疑問は残る。

W が幻視したのはロビンの祖父が死亡する 3 日前なので、この点を強調すれば、W の幻視はテレパシー的なものではなくて、予知的なものであったと言えるかもしれない。たしかに W は幻視と白日夢のエピソードを記述した後で、「友だちのロビンのお母さんは、いろんなことを私が『知る』能力に魅せられてしまった」(My ability to “know” things fascinated my friend Robyn’s mother) と書いている（訳者の河野万里子氏は、「一方ロビンのお母さんは、わたしの「予知能力」にすっかり感心してしまい」と訳している）。このように見てくると、いわゆる予知夢と同じように、W は幻視で前もってロビンと関係の深い男性（祖父）の死を予知し、一方ロビンのほうは予知能力を持たなかったというふうに言えるかもしれない。

中学時代の白日夢は W の白日夢のなかに動いている生徒たちの映像が見えて、W が後でそれを直接生徒たちに確認してみると、白日夢で見たものと実際の生徒たちの行動・動作が一致していたということなので、これは夢の用語で言えば「透視夢」(clairvoyant dream) に相当しよう。もっとも、白日夢で見た時点と実際の生徒たちの行動・動作の時点とが相当離れていれば W が見たのは予知的な白日夢ということになるが、W の記述にはそういったニュアンスはない。

ちなみに、既述の幻視というテレパシー現象は、もしも W がロビンの祖父の心のなかを透視したとすれば透視夢に近いものとなるが、この場合、なぜ W がロビンの祖父の心のなかを透視しなければならなかったのかという疑問は残る。しかも、W が男を幻視したときには、W はそれがロビンの祖父であるということを知らなかったのである。

W が 21 歳のときに見た D5「私の誕生日に 3 人で乾杯する夢」の最後は、W の誕生日に、見知らぬ黒い髪の若い男性（大学のキャンパス内の寮に住む医学部の学生のチーム）と親友の女性（W の中学時代の友人ステラの知り合いのカレン）と W の 3 人がアンティークレースのテーブルクロスのかかったテーブルの周りに立って、クリスタルグラスを掲げて乾杯し、若い男性と女性が W に「お誕生日、おめでとう」と言うというものであった。そして、この夢の後 W は医学生生のチームと実際に知り合い、親しい関係となる。また、ステラと行ったナイトクラブでカレンとも再会する。そして、この D5 の 2 年後の W の誕生日にチームを呼んで（カレンは既に W の許に引っ越してきていた）、3 人でアンティークレースのテーブルクロスのかかったテーブルを囲み、クリスタルグラスのワインで乾杯する。チームとカレンが W に「お誕生日、おめでとう」と言った瞬間、W は 2 年前に見た D5 のことを思い出してショックを受ける。W からすれば、D5 の夢はこのように 2 年後、その細部に至るまで現実となり、とても薄気味悪かったという。

この、大学時代に見た D5 では未来の出来事が予め夢のなかに現れているので、これはいわゆる「予知夢」(precognitive dream, premonition dream) に相当しよう。

以上、テレパシー現象としての幻視もしくは予知的な幻視、透視としての白日夢、予知夢といったものが記されているが、これらの真偽の判断はなかなかむずかしい。特に予知夢の場合には未来の出来事の予告・予言なので、実際に未来の出来事を夢が予知したのか、それとも夢と同一の出来事が後で偶然に生じたのか、あるいは、（3 人で乾杯したときに W は 2 年前に見た D5 を思い出してショックを受けているので）W の記憶錯誤によって夢の細部まで現実と一致しているというふうに W が思いみなした（誤判断した）のか、第三者による厳密な検証が必要とされよう。

真偽問題はともかく、W が 28 歳のときに出版した *Nobody Nowhere* のなかにこれらのエピソードをわざわざ記したのは、自分には感覚の過敏性・鋭敏性のみでなく、一種の霊能者的特性が備わっているということを強調したかったのであろうか。この点はよく分からない。ちなみに、W は諸著作のなかで死者との交信のエピソードをまったく記していないので、W にはいわゆる「霊媒」(medium) としての特性はうかがえないようである。

Ⅲ *Autism and Sensing* に見られる夢とエピソード

Autism and Sensing (W, 1998) は W が 34 歳のときに出版した本であるが、そこには大変興味深い夢 (D7) とエピソードが記されている。

W は、何百マイルも離れた所に残してきた人（男性）のこゝろを感じ取ることにひたって気持ちが深く慰められていたとき、彼が金属的な光沢のある赤 (the colour metallic red) をくれるという夢を見た。この夢の後まもなくして W の郵便受けに、彼が彫刻を施した、金属的な光沢のあるひとひらの小さな赤い金属板 (a piece of metallic red metal) が届いた。そして、W はそのすぐ後にテレビで、オリンピックのフィギュアスケートの Katarina Witt (1965-) が優勝するのを見て外に出て、乾燥した紫色の野の花を取って封筒に入れ、彼に送った。すると、W の花が彼の許に届いたのと同じ週に彼からの手紙が W に届いた。彼もまたテレビで Katarina Witt を見て、W のことを強く思ったという。そして彼からの封筒のなかには、W が送った花ではないが同じ紫色をした花が幾輪か入っていたという。(旧東ドイツ出身の Katarina Witt は、1984

年のサラエボオリンピックと1988年のカルガリーオリンピックの2回、女子シングルのフィギュアスケートで優勝。Wと彼がKatarina Wittをテレビで見たのがどちらの年かははっきりしない。)。

以上の夢とそれに続くエピソードには詳細がよく分からないところがあるし細かな違いもあるが、それはともかく、金属的な光沢のある赤の夢を見てまもなくして金属的な光沢のある小さな赤い金属板が届いたこと、Wも彼もテレビでKatarina Wittを見たこと、Wが乾燥した紫色の花を送ったら同じ週にやはり紫色の花が幾輪か届いたこと—これらはいわゆる「偶然の一致現象」と言われるものであろう。もっとも、2つの事象の類似性や時間的接近性といったものを考慮すると、概念的にはかつてJungが強調した「意味のある偶然の一致 (meaningful coincidence)」、つまり「非因果的連関 (acausal connection)」に相当するかもしれない (Jung & Pauli, 1955)。しかしながらWは、「意味のある偶然の一致」といった概念は用いない。Wは、「私と彼とはお互いに共振していた」と言う (We had been resonating with each other.)。

W (1998) によれば、人間が生きるにあたって用いるシステムには、自己の感覚・感性を通して世界と関わる「感覚システム」(the system of sensing) と、意識的思考や常識に基づく「解釈システム」(the system of interpretation) の2つがある。前者の感覚システムには、事物や場所や人々との共振が含まれる。ここで共振 (resonance) とは、対象との交感 (empathy) である。感覚する人間はその交感作用を通して魂 (あるいは万物に偏在している「神」) を感じる。高度の感覚人 (a highly sensing person) とは、エネルギーを送ったり受け取ったり、あるいは両方のエネルギーに対して開かれている人のことである。健康かつ建設的な「善」のエネルギーが感覚されるのと同様不健康で破壊的な「悪」のエネルギーも感覚されるが、Wの考えでは、感覚する人間 (sensing beings) は、解釈システム内にもっぱら住んでいる人たちよりも「悪」の手に墮ちにくい。

ちなみに、解釈システムが始動して感覚システムにとって替わるというのが発達上の自然な流れであり、感覚システムから解釈システムへの移行は通常、生後数日から数週のうちに生ずるといふ。ただし、Wの場合には、感覚システムから解釈システムへの移行は3歳のころに生じたという。もっとも、解釈システムへの移行と言っても、Wの感覚システムがなくなったわけではない。Wの解釈システムのほうはいわば第二言語として働き続け、かなりの年を経た後でも2つの同等の言語の1つとして働いているし、W自身これら2つのシステムを適度に使い分けられるようになったという。

ともあれ、Wにあっては、感覚システムは消え去らないで働き続けている。それによってWは水や木に溶け込んだり、頭上で煌めくシャンデリアを見上げて「神と溶け合うような」恍惚感に浸されたり、Wと同じように感覚システムを用いている人と交感したり、さらには、Wが安全だと感じることのできる人のところへ非物質的に訪問したりする。[ここで非物質的な訪問とは、Wの説明では、実体 (entity) がWの身体を抜け出していくという身体離脱体験 (out-of-body-experience) のことを指している。] Wはこのように、解釈システムが支配している常識の世界とは異なる場所に身を置いている。

以上のことからすれば、前節で述べた中学時代のロビンの祖父の幻視は、ロビンの祖父とW

との共振（交感）ということになるかもしれない（この場合、なぜ2人が共振したのかはよく分からない）。また、白日夢で子どもたちの行動を見たことが子どもたちの実際の行動と合致していたのは透視ではなくて、Wの実体（魂？）が身体を抜け出して生徒たちを訪問した身体離脱現象ということになろう。ただこの場合、生理学的身体を有しない実体、つまり知覚器官や脳を有しない実体がどのようにして生徒たちを見ることができたのかという疑問が残るので、身体離脱体験は説明概念としては少し無理があるのではないと思われる。

D5の予知夢については、基本的に予知という観点から説明することはむずかしいと思われる。予知夢という場合、例えばWの夢のなかに日記が出てきて、そこには「今から2年後の〇〇年〇月〇日、ティムと呼ばれる男性とカレンと私の3人で私の誕生日のお祝いをする」といった記事が書かれていて、それから2年後にまったく同じことが起こったというのであれば予知夢と言える可能性が少し出てくるように思えるが（この場合夢の予言が現実化するよう夢主が無意識的に行動したという可能性は排除できない）、2年後の誕生日に2年前に見た夢を「思い出した」という形なので、記憶の変更によって2年前の夢の内容が今の現実とまったく同じにされてしまったという可能性とか、2年前の夢そのものがWによって過去遡及的に作り出されてしまったという可能性を否定できないからである。

彼がWに金属的な光沢のある赤をくれるというD7の夢を見てまもなくして金属的な光沢のある小さな赤い金属板が彼から届いたことについては、これは予知夢に近いものと言えるかもしれない。ただし、Wの記述に従えば、事の次第は、①Wが彼のことを思う→②彼が赤をくれるという夢をWが見る→③それからまもなくして彼から小さな赤い金属板が届く、となっている。結局これは、彼へのWの思いが彼に届いて彼がその印として小さな赤い金属板をWに送ったが、そのときの彼の思いと行為にWが共振してD7の夢を見る、そしてその夢からまもなくして彼がWに送っていた小さな赤い金属板がWの手元に届く、となろう。このように見てくると、D7は、2人間の相互的な共振の産物であろう。

D7の後のことについて言えば、Wが乾燥した紫色の花を送ったら同じ週に紫色の花が幾輪か届いたとあるが、これは同じ週内だが何百マイルといった距離なので、Wが送った紫色の花入りの封筒を彼が実際に見て、彼のほうも同じ紫色の花入りの封筒をWに送ったという可能性が若干残る。もちろん、Wからの封筒を受け取る前に、彼がWの行為を感知して同じ紫色の花をWに送ろうとして、紫色の花を数輪摘み取って封筒に入れてWに送ったという可能性はある。この場合には、Wが書いているように、Wと彼とは相互に共振（交感）したということになる。もっとも、紫色に関しては、彼に届く前のWの封筒のなかの花の色を彼が例えば透視によって把握していたとか、予知的な夢ないし白日夢を彼が予め見て把握していたといった可能性は残る（花そのものは、Katarina Wittの優勝とそれを祝う花といった、社会的に共通な認識パターンによるものであろう）。このように見てくると、Wの言う「共振」は、超心理学で取り上げられている予知や透視現象などと密接に関係しているようである。

IV おわりに

本稿では以上、Wが見た幻視・白日夢・夢のなかの超自然的性質について、可能な限りWの

内的枠組みに沿いつつ整理してみた。そのさい、W が提示する説明概念と実際の出来事との食い違いに留意しつつ疑問点も整理した。

筆者個人としては、共振よりも、偶然のほうをより重要視したい感じがある。つまり、ある出来事がほぼ同時に生じたとき、それは共振か偶然の可能性がある。後者の偶然には、単なる偶然の一致の場合と、意味ある偶然の一致の場合とがある。

単なる偶然の一致と意味ある偶然の一致との違いは、出来事に対する当事者の認知（構え）の違いである。例えば、ある男性から赤をもらう夢を見てまもなくして赤い金属板が彼から届けられた場合、これら2つのことを単なる偶然の重なりとみなすのか、それともこれら2つの重なりには何らかの意味や意義があるとみなすのかという違いである。前者の場合には出来事の忘却となるが、後者の場合には隠された意味の探究となる。そして、隠された意味を探究していくことは、彼と当事者との関係性に目を向けることになる。

偶然の一致を意味あるものとみなしていこうとする態度（偶然のなかに必然を見出そうとする態度）は、主体と主体を取り巻く環境との目に見えない連関を表に出していこうとする態度であり、これは結局、W の言う感覚システムや解釈システムを補完するものではないかと思える。なぜなら、W の言う「感覚」は対象との共振・交感を目指し、「解釈」は言葉や常識を用いて対象を相対的・個人的な重要度に応じて差別化し階級づけすることを目指すからである。つまり、前者は対象との融合を目指し、後者は対象を社会的に価値づける（重みづける）ことを目指すので、両者はそれぞれ次元が異なっている。そのため、二つのシステムのみしかないと人が生きていくことに不足が生じてこよう。

偶然のなかに必然を見出そうとする態度はやがて、自分や対象がより大きな連関のなかに組み込まれているという気づきをもたらし、次に、より大きな連関とは何なのかを探究していくことになる。対象との融合にしる対象の価値づけにしる、それらは自分と対象とが別々のものとして並列的に置かれている。しかし、より大きな連関を見ていくことは、自分と対象とを相互に活性化していくような1つの潜勢力のようなものを探していくことになる。これは、主体が対象と融合する・融合しないとか、主体が対象を高くあるいは低く価値づけるといった動きとは異なるものである。

2つの出来事が類似した形でほぼ同時に生じたとき、それは二者間の共振によるものであるという説明は、見方によれば、意味ある偶然の一致というカテゴリーのなかに入るのかもしれない。もっとも、共振の場合には、お互いがお互いのエネルギーを感知して相通じたからこそ2つの出来事が同時に生じたということになる。ここでの共振は、2つの出来事がほぼ同時に生じた理由を説明する説明概念となっている。しかし、意味ある偶然の一致の場合には、2つの偶発的な出来事の意味を主体のほうが発動的に探していくことになる。そしてこの探求は、人が生きていく間続くことになる。

本稿では、W の考え方に対して少し批判的な見方を提示したかもしれない。しかしW は、「自閉症」と向き合いつつ、彼女と出会った（もしくは出会うことになる）人々や出来事との交錯の意味を彼女なりに真摯に求め続けたものと言えよう。

[付記] 本論文は、2015年5月31日に開催された日本心理臨床学会第34回春季大会ワークショップにおいて筆者が発表した「自閉症者の夢分析—ドナ・ウィリアムズとテンプル・グランディン」に加筆したものである。

文献

- Jung CG, Pauli W (1955) *The interpretation of nature and the psyche*. New York: Bollingen Foundation Inc. (河合隼雄・村上陽一郎訳, 1976, 自然現象と心の構造—非因果的連関の原理, 海鳴社)
- 名島潤慈 (2009) ある自閉症者の夢分析—Donna Williams の見た子猫の夢の検討 山口大学教育学部研究論叢, 59, 第3部, 253-260.
- Williams D (1992) *Nobody Nowhere: The remarkable autobiography of an autistic girl*. New York: Harper Collins Publishers. (河野万里子訳, 1993, 自閉症だったわたしへ, 新潮社)
- Williams D (1998) *Autism and sensing: The unlost instinct*. London: Jessica Kingsley Publishers. (川手鷹彦訳, 2009, 自閉症という体験—失われた感覚を持つ人びと, 誠信書房)
- Williams D (2004) *Everyday heaven: Journeys beyond the stereotypes of autism*. London: Jessica Kingsley Publishers. (河野万里子訳, 2015, 毎日が天国—自閉症だったわたしへ, 明石書店)